



玉虫

昆虫好きを名乗る方も多くいると思いますが、「玉虫に詳しい人は平成の初めまでいなかった」と聞いたら意外に思いませんか？

そんな生態未知の玉虫に夢中になって研究所を作り、日本で初めての飼育本を出した方が藤枝にいらっしゃいます。 芦澤七郎さん、84歳。



玉虫

そもそもは、オオクワガタに驚くような高値が付いたバブルの頃。芦澤さんも、人が飼わないような虫を育ててみたいと、玉虫(ヤマトタマムシ)を飼うことを思い立ちます。

葉梨川の上流へ捕りに行きますが、全く捕まえることはできず、農協の協力を得て1匹5千円で買いたいと放送してもらい、35匹を集めました。1年目はすべて死んでしまいます。

飼い方をあれこれ調べてみましたがどこにもなく、上野の自然科学博物館や岐阜の名和昆虫博物館にも出かけてみましたがわからず、名和の館長さんからは「玉虫は飼えない」と言われます。



[玉虫](#)
日本で初めての玉虫本（現在は絶版）

平成元年から数年間、玉虫を買い集めながら観察を続け、榎の葉しか食べないことや、卵を枯れ木に産み付けること、幼虫は木の中で過ごし、3年目に成虫として出て来て2ヶ月で死んでしまうことなどがわかり、日本で初の人工飼育にも成功します。

それまでは研究発表されたものもなかったもので、興味を持つ人に生態や飼い方を知らせたいと、初の玉虫本を出し、研究所も設立します。



[image1](#)

(左) 韓国の「玉虫の馬具」復元披露の除幕式での写真



[玉虫](#)

(右) タマムシの里に飾られている復元された馬具

平成17年、韓国で発掘された1500年程前の玉虫の羽で装飾された、馬具の復元に協力を依頼され、それまで保管してきた1000匹の標本を無償提供。韓国の人間国宝の方の手により復元され、18年4月の披露時には玉虫博士として招待され、除幕式の幕を引くという栄誉に預かったそうです。

韓国に玉虫は殆どおらず、1500年前は現代よりも更に気温が低かったので、交易の盛んな時代に目に留まった、美しい日本のヤマトタマムシの羽が朝鮮半島に渡り、この馬具に使用されたと考えられます。

法隆寺にある国宝の玉虫厨子と同じ技法で、より早い時代に作られており、工芸技術が後に日本に渡ってきて厨子が作られた、ということになるのでしょうか。



[image7](#)

23年には、この韓国の「玉虫馬具」と、法隆寺の「玉虫厨子」それぞれの復元に挑んだ日韓の職人を描いたドキュメンタリー映画「海峡をつなぐ光」も公開されました。



[玉虫](#)



[玉虫](#)

よそとは少し違うところに目を付け、元々のご商売も繁盛されていたという芦澤さん。なればこそ、玉虫とのご縁だったのかもしれない。

タマムシは吉丁虫と書かれ、縁起が良いと言い伝えられる美しい虫なので、これを地域の活性化にも繋げたいと、24年には80歳を前にして、この羽をアクセサリーに加工する工房「タマムシの里」も開きました。藤枝の産業に育てようと、子供たちに親しんでもらう活動等と共に市立病院でのボランティアもされ、生き生きと動き回っておられます。

「タマムシの里」ではアクセサリー作りの体験もできるので、興味のある方は、054-644-9030までお問い合わせください。

志太榛北生きがい特派員 増田昌江